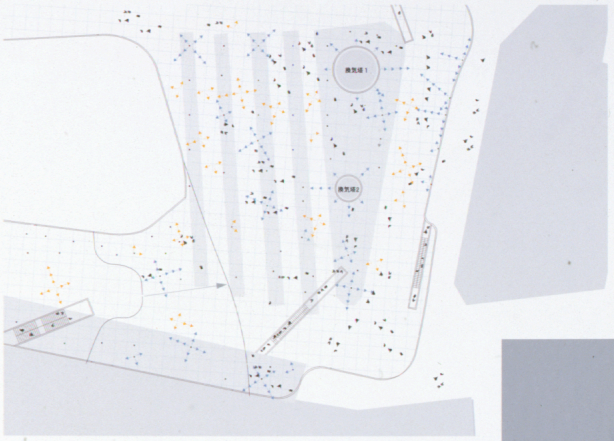
ANOTHER SKY　都市に浮かび上がるもう一つの空（＝雲のアトリウム）

古来からアトリウムは時代のニーズに従って、形態とともにその概念を変化させながら常に変っている。
したがって、回廊に囲まれた中庭としてのアトリウムから、20世紀に出現したガラスのアトリウムまでその概念を規定することは難しいと思う。いったいアトリウムとは何か。21世紀のアトリウムとはなにものであろうか？
そのヒントは、外部空間との接し方にあると思う。どの時代においてもアトリウムは外部（自然）といかに接し、それを建物内に取り込むかが重要なポイントとなる。
ここでもう一度、古来からのアトリウムを考えてみると、回廊によって囲われていた中庭型のアトリウム空間は、自然を回廊によって切り取ることで
外部空間を内部に取り入れている。アトリウムは外気に対して直接ふれる形となっていた。
現在主流であるガラスのアトリウムは、ガラスという透明な素材を通して、内部と外部を一体化させることでその概念を築している。ガラスによって囲われた内部は、木々や水といった自然を取り込むことによって、自然を演出することでより豊かな自然を建物の内部に取り込んでいる。アトリウムは限りなく外部に近づけようとするあまりに、
ここに来てもうひとつのアトリウムの形が出てきている。ラスベガスのアーケード や、お台場のビッグフットの内部につくられた空間がそれである。アトリウムは、ガラスのアトリウムとまったく逆の発想で、内部空間と外部空間を完全に分断して別世界を作り出す。アトリウムは映像といったフェイクの空を通して外部と接することとなる。

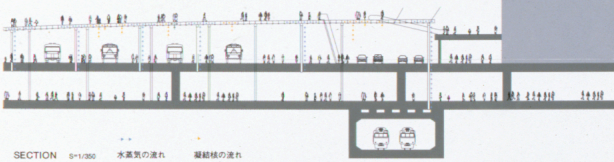
21世紀のアトリウムとは何であろうか。
やはり、外部空間の捉え方にあると思う。
どう外部空間と接していくのであろうか。
それは社会のニーズによるものと思われる。そして現在の社会ニーズは、月並みだが情報であろう。
こんな一方的な理論を組み立てると、なんとなく21世紀のアトリウムのイメージが作り上げられてくる。それは、20世紀のガラスのアトリウムとフェイクのアトリウムの中間に位置しているものである。

イメージはこんなものだ。
一一内部空間は情報という膜で包まれている。内部空間は情報を介して外部空間と接している。あるときは限りなく外部に近い空間となり、あるときは情報によって外部空間と遮断されることで、アトリウム空間が絶えず変化する。

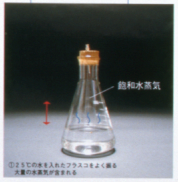
このプロジェクトは、都市の中に雲のアトリウムを作り上げるものである。この雲は都市の環境の変化、ヒートアイランドや排ガス、水蒸気などが作りだす雲である。いわば都市の中のもう一つの空である。ここでの雲は情報を伝える媒体として存在する。私たちがすむ都会は、快適さを求めることからもう一つの快適な環境を作り上げたが、その一方では、ヒートアイランドや排ガスによる光化学スモッグなど、異常な環境を作り上げてきたことも確かである。このアトリウムはそういった異常な環境を映し出すための装置である。
このアトリウムは、都市が発生する熱や排ガス、水蒸気が多ければ多くなるほど多くの雲に覆われる。そこに訪れた人はやわらかく幻想的な光に包み込まれることになるだろう。



PLAN　S=1/650



SECTION　S=1/350　水蒸気の流れ　凝結核の流れ



飽和水蒸気状態へ（熱,水蒸気）

凝結核を入れる（排気ガス,チリ）

圧力を下げる（雲の発生）

都市現象から雲を作り出すための実験